

## 痴呆性老人の音楽療法における臨床的治療効果の 定性的評価法に関する日英比較研究

昨年度、助成を賜る機会を得ましたことに、感謝申し上げます。

私は、1999年10月より2000年3月まで、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジの客員教授として、英国の音楽療法の理論と実践を研鑽させていただきました。

なぜ英国を選んだのかと申しますと、音楽療法というものは、我が国におきましてはまだ数10年余りの浅い年月ではございますが、ほとんどがアメリカの行動力学的な音楽療法が主流になっております。しかし私の研究しております対象が、痴呆性老人ということで、その患者さんがどのようなことを考えているのか、音楽療法によってどこまで意識が戻りつつあるのか、いわゆる行動にあらわれる前の部分で非常に長いタームがございますので、どうしても心理学的な考察が必要となってまいりました。論文を読んでいるうちに、どうしてもイギリスの精神力動学に基づいた音楽療法を直に学びたくて行かせていただいた次第であります。

6ヶ月間はあっという間に過ぎて、正直なところ、もう少し1年のフルタームを勉強したいと思うほどでした。

今回の留学では、単なる6ヶ月という滞在期間を超えて、これからの研究の基礎的な足掛かりができたと思っております。これは実際に行かなければならない。そして何ヶ月間かの膝を交えたディスカッションの末、初めて築くことができた研究者間の信頼関係でありまして、将来の可能性を大きく展開するものであったと確信いたし、改めてこの機会を得たことに感謝いたしております。

さて、本日の研究発表であります「痴呆性老人の音楽療法における臨床的治療効果の定性的評価法に関する日英比較研究」は、実は4年前から東北大学医学部附属病院と筑波大学工学研究科の協力を得て、始めさせていただいた共同研究の一部であります。これからの私の発表の中でセッション、クライアントという言葉を使わせていただきますが、セッションは音楽療法における実践のことを意味し、クライアントとは患者さんとダブルことが多いのですが、音楽療法におきましては、障害を持ちましても医療を現在必要としていない方もおります。しかしその方は、実際に障害を持っているために何らかの援助が必要でありまして、そういう広い意味を含みまして、クライアントという言葉を使わせていただきます。

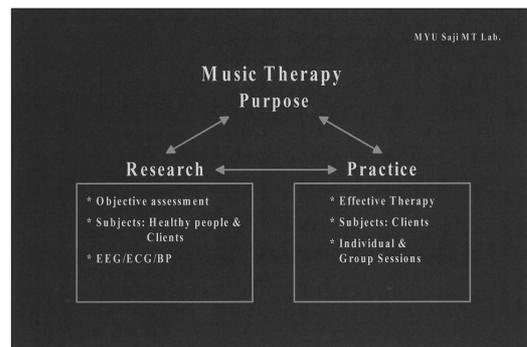
### 【スライド1】

音楽療法の目的は、先天的であれ後天的であれ、身体的に或いは精神的に障害を持った方々の病気を改善し、QOLの向上を目指す医療援助の一つと考えられております。これは、1951年にアメリカの音楽療法協会



宮城大学看護学部  
教授  
佐治 順子

スライド1



が設定された時の基本理念でありますが、現在も変わっておりません。

そして、実践と研究がその目的を支えています。

実践における目標は、効果的な音楽療法を行うことであり、対象は全てクライアントであります。セッションは適宜個人セッションとグループセッションに分けて、行われます。

研究におきまして、我々は客観的評価法を確立することを目標にいたしました。対象は、健常者とクライアントです。まず健常者のデータを取り、それを基にクライアントのデータと比較し、最も効果的な評価法をリサーチしようという方法です。それには脳波、それから脳磁場、血圧などの指標がありますが、今日は脳波に関して、お話しさせていただきます。

### 【スライド2】

音楽療法におきましては、クライアントとセラピスト（音楽療法士）が交わっていくわけですが、そこにおいて音楽を使うということで、音楽療法になります。音楽の代わりにアートを使いますとアートセラピーになります。

我々のリサーチは、まず使用する音楽それ自体の音楽学的アプローチから始めました。つまりまず音楽学的アプローチとして、音楽を数理構造的に捉えました。どうして音楽を数理構造的に捉えるのかと申しますと、脳波との関係で考察する場合、脳波計に音楽のデータも入れる必要があるからであります。

それから、実際にどのような音楽が有効なのか、特に痴呆の方にとって記憶を呼び戻す、効果的な音楽とは何なのかを明らかにするために、楽曲の作曲年表を作製しました。これによってクライアントの年齢から有効な楽曲を選曲することが可能になりました。

次に、音楽がクライアントにどのような影響を与えるかという、生理学的アプローチをしました。クライアントに対する心理学的なアプローチとして、アンケート調査から、音楽嗜好について考察しました。

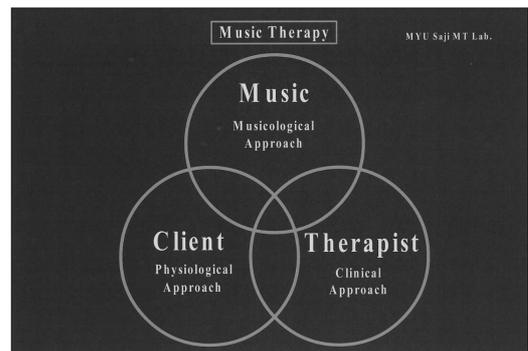
その後セラピストが、この2つのアプローチを踏まえて、実践でどのように接していけば良いのかという臨床的アプローチをするという方法論です。

音楽とクライアント、セラピストの共有部分の面積が広がっていけばいくほど、音楽療法効果が高いということになります。

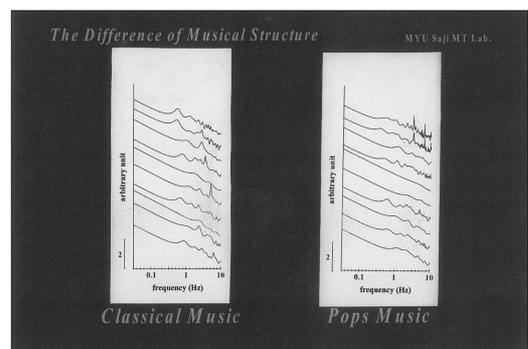
### 【スライド3】

たとえばこれは音楽を数数学的にとらえたものです。楽曲全体を捉えた解析図では、クラシック音楽とポップス音楽（実は後者が非常に若者に好まれる音楽なのですが）は、ほぼ $1/F$ ゆらぎに近い形ですが、実際の内部構造を見ますと、これは1分毎に分解したのですが、全くクラシック音楽とポップス音楽の中身が違うということが分ります。

スライド2



スライド3



【スライド4】

これが今回の脳波測定で使った楽曲のAR法解析図であります。

左端の演歌「雪国」のCD盤です。クライアントにとっては50歳代に流行した曲です。ですからこれが感知できるということは、かなり記憶が新しいところまでであるということになります。

真ん中の上段の民謡「斎太郎節」（これは宮城県の民謡ですが）のCD盤は、非常に早いテンポでありまして凹凸が多くみられます。その右は、我々のセッションで行っている音楽療法（MD）の録音でありまして、なだらかで1/Fゆらぎに近い形になっております。

そして真ん中の下段が童謡「夕やけこやけ」です。この曲にもともとゆっくりしたテンポであるため1/Fゆらぎに近い形ですが、CD、MD盤とも多少の凹凸がみられます。

【スライド5】

これが脳波の国際10-20法による19電極図です。今回我々は、13人の被験者をお願いいたしました。内訳は女性が12人と男性が1人です。そしてだいたいMMSが0～14点（痴呆度が重～中度）の方達です。

【スライド6】

これは、脳波と音楽（V, F）の生データであります。ここが我々の非常にユニークな部分でありまして、たとえば脳波が大きく変化した場合に、音楽のどの要素が作用しているのかということがリサーチできるわけです。

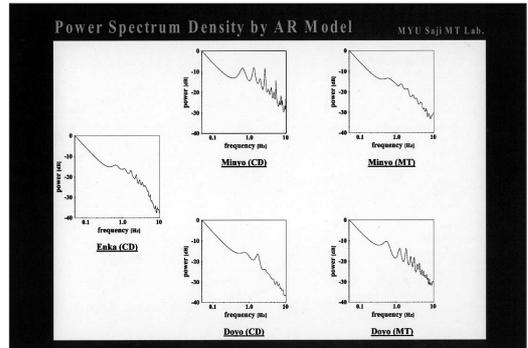
【スライド7】

これは日本と英米の音楽療法研究の比較であります。

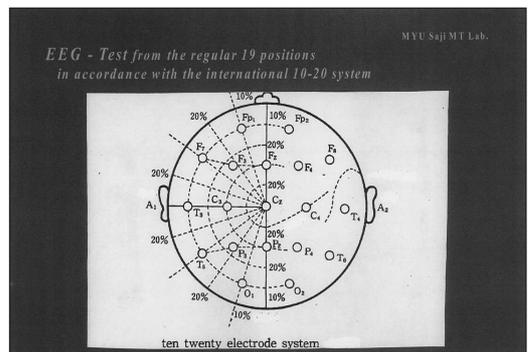
日本におきましては、特殊教育・学習障害、それから音楽療法についての教育・一般概説等の割合が多いのでありますが、英米におきましては、教育・一般及び一般医学の割合が非常に多くなっております。特に医学的研究は日本におきまして最も少なくともわずかに1%のみであります。

従って日本で本当に医療の中に音楽療法が組み込まれていくためには、この医科学的

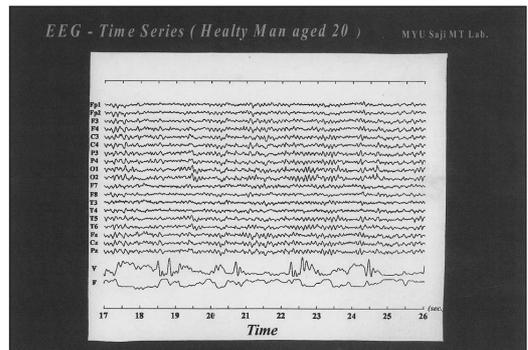
スライド4



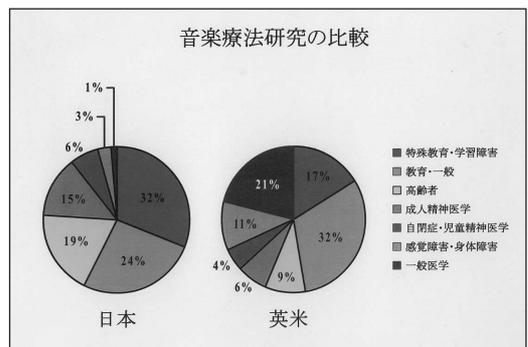
スライド5



スライド6



スライド7



研究がもっと拡大されなければならないということでもあります。

### 【OHP】

これは脳波のフラクタル解析図であります。

(a) 一番上が安静脳波です。個人差を無くすために、我々は必ず安静脳波を基準として解析をしております。

(b) 2番目が演歌を聴取した時です。非常に起伏が大きくなっております。

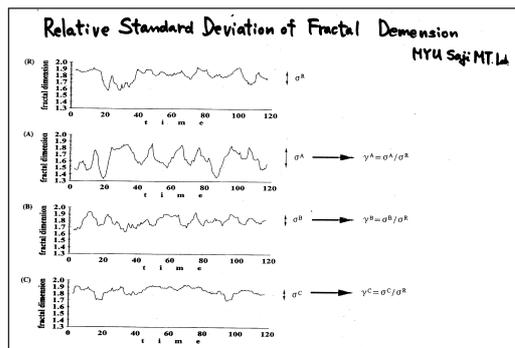
それに対して (c) 3番目は、民謡 (CD) を聴取した時であり、(d) 一番下が民謡の音楽療法の場合 (MD) であります。最もなだらかなっております。

つまり音楽療法における評価というのは、この非常になだらかなっている部分をより詳しくチェックできれば、効果的であったかがリサーチできるのではないかとということでもあります。

私はこの方法をイギリスにおいて発表させていただきました。イギリスでは、このような脳波を使った評価法というものは、医学だけの分野ではあるのですが、医学と音楽療法との接点では、まだあまりなされていないということでありました。従って、この方法をより押し進めて欲しいという依頼を受けてまいりました。

おかげさまで、帰国いたしましたしてから、イギリスだけでなくアメリカの研究者からも問い合わせをいただいております。来週、アメリカの第50回音楽療法研究会で発表する機会も得まして、共同研究の話も持ち上がっております。また、来年 (2001年) の2月4日、宮城大学でイギリスの音楽療法の権威でありますロバーツ先生をお呼び致しまして、「英国の音楽療法の理論と実践」の講演会も予定しております。これら全ては、助成による賜物であったと深く感謝しております。

OHP



## 質疑応答

**Q :** 今のスライドにありましたように、日本では医学の分野とあまり接点がないというようなことなので、今後どういう方向に行くのか。医学にはたくさんの専門職が生まれつつありますが、音楽療法士という専門家についての見通しなどは、どうなっているのでしょうか。

**A :** 多分、数年後には厚生省からも認可が頂けるのではないかと期待しております。それに向けて、我々音楽療法をやっている研究者は、更に医学的な、生理学的な研究を積み重ねて、医療の現場に取り入れられるように努力しなければなりません。その一部に貢献できれば、幸いと思っております。